

老年看護学におけるおむつ装着体験からの学生の学び ——おむつ装着中の高齢者への援助方法——

山本 君子, 内山 淳子

key words: 老年看護学, 高齢者, 体験学習, 紙おむつ, 看護学生

東京医科大学看護専門学校

【要旨】 本研究は、看護学生（以下学生とする）が、おむつ装着体験を通して、評価と感想、高齢者への援助方法を明らかにするために調査した。

調査項目は、おむつ装着体験の評価、おむつ装着後の感想、おむつ装着している高齢者への援助について設定した。対象者は、学生2年生85名に、自記式質問紙を行い、45名（回収率52.9%）の有効回答を得た。結果は、おむつ装着体験の評価として、大変良かった、良かったと回答した者は41名（91.1%）であり、理由として「体験することは患者の気持ち分かりよかった」といったおむつ装着している高齢者への共感的態度が形成され、患者理解への意識の変化につながった。感想は、おむつ装着してみて身体的な不快や精神的な負担を具体的に実感し、おむつ装着している高齢者の気持ちに近づき、改めて排泄という基本的な日常生活行為について考えられた。おむつ装着している高齢者への援助については、「プライバシーの厳守」「不快からの開放」「おむつからの離脱」「自尊心を傷つけない対応」「快適なおむつ装着に向けて」「皮膚の観察」「清潔の保持」「体位の工夫」「抵抗感の軽減」の9項目を学生は捉えることが出来た。今後の課題としては、学生のおむつ装着体験を共有する場を設け、高齢者の排泄援助のあり方を検討する機会とすること、体験から得られた結果を教育内容に反映できるように教育方法を工夫することである。

I. はじめに

わが国の人口は少子高齢化が進み、昭和22～24年生まれの第一次ベビーブーム世代が65歳を迎える2015年には高齢化率は大きく上昇し、10年後の2025年には後期高齢者を迎え、高齢化はピークを迎える。高齢社会を迎え、入院患者の多くは高齢者が占めているのが現状であり、社会が看護職者に求める役割は大きい。

高齢者は、老化現象の進行に伴い、腎機能の低下、膀胱機能の低下、心血管系の変化、夜間尿生成量の増加などにより、夜間頻尿や尿失禁などの排泄障害を起しやす¹⁾。

これらのことから、おむつを利用する高齢者が増加し、日常化の傾向にあるが、人の手を借りて排泄をしなくてはいけないことは、恥ずかしく苦痛である。また、おむつ使用は、寝たきりや認知症を伴いやすい。

排泄ケアは、高齢者の自尊心に関わるケアであることも言うまでもない。高齢者の排泄援助を実施するためには、その人の立場にたって理解することが必要であり、そのために看護基礎教育の段階から具体的に理解できるような教育方法の一つとしておむつ装着体験を取り入れている。学生がおむつ装着体験をすることについて、プライバシーや人権という倫理的な側面から賛否両論である。しかし、森⁴⁾は、「体験は経験化によって未来に開かれたものになる」と述べている。体験は、言語化、分析、意味づけなどの知的営みを通し経験として蓄積され看護ケアに活かされると考える。

これまで多くの看護学校では、基礎看護学や老年看護学における「排泄援助」について、講義に加え、体験を通して看護の対象の理解を深める演習などを取り入れ、その効果に関する報告がある^{2)～5)}。しかし、学生のおむつ装着体験の評価やおむつ装着中の高齢者

への援助方法の具体的な項目などについて調査・検討されたものは少ない。

そこで、老年看護学Ⅱの講義において、本校の2年次の看護学生（以下学生とする）が、おむつへの装着体験を通して、評価と感想、おむつ装着している高齢者への援助方法について捉えることができた内容を明らかにする。

II. 研究目的

老年看護学Ⅱの講義において、学生のおむつ装着体験の評価と感想、高齢者への援助方法の内容を検討し、おむつ装着体験学習の意義を得る。

III. 研究方法

1. 対象

3年課程の都内A看護専門学校に在学する看護学生2年生85名。

2. 調査方法および期間

調査方法は、無記名の自記式質問紙法を用いた。配布方法は、老年看護学Ⅱの講義がスタートしおむつ交換の校内実習の前とし、回収方法は、約1ヶ月間の期間を設け留め置き法とした。

調査期間は、2007年5月25日～6月15日

3. 調査内容

1) おむつ装着体験方法

- ① おむつを装着し臥床にて排尿後、2時間以上経過する。
- ② 臥床して排尿がない場合は、トイレでおむつに排尿後、2時間以上経過する。
- ③ おむつに排尿できなかった場合は、200～300mlの微温湯をおむつに湿らして装着し、2時間以上経過する。

2) おむつの種類

- ① テープ付き紙おむつ
- ② 体型によりSMLを選択

3) 質問紙の項目

- ① おむつ装着体験の評価
- ② おむつ装着後の感想
- ③ おむつ装着している高齢者への援助

4. 分析方法

質問紙項目は学生が記入しやすいような表現とし、①おむつ装着体験をしてみてもいかがでしたか。理由もご記入ください、②貴方がおむつ装着体験を実施してみて、思ったことや感じたこと、考えたこと、何でも

よいので自由にお書き下さい、③おむつ装着している高齢者への援助にはどのようなことがあると思いますかの3項目とした。質問項目に沿って、学生が自由に表現したものを、共同研究者2名で記述の意味を読み取り、抽出した記述内容を意味・内容が変わらないように要約し、類似性・相違性に従い分類した。

質問紙項目の「おむつ装着の評価」の回答形式は、「大変良かった（5点）」「良かった（4点）」「どちらともいえない（3点）」「良くなかった（2点）」「大変良くなかった（1点）」の5段階で評定を求めた。

分析は、単純集計とした。

5. 倫理的配慮

調査を依頼する際は、研究対象者に対し、本研究の主旨、研究参加の自由意志、どの段階でも辞退できる旨、プライバシーの保護、個人情報厳守することを文章で示した。また、成績には影響しないこと、個人の不利益にならないことを口頭で説明し、承諾を得られた者のみを対象とした。

III. 結果

調査に協力を得られた看護学生2年生85名に配布し、45名（回収率52.9%）の回答を得た。

1. 対象者年齢

調査対象者の年齢を表1に示した。年齢は、最小年齢19歳、最高年齢31歳であり、平均20.0歳（標準偏差2.54）であった。19～24歳79名（93.0%）、25～29歳5名（5.9%）、30歳以上1名（1.2%）であった。

2. おむつ装着体験の評価

おむつ装着体験の評価を表2に示した。おむつ装着体験をしてみて、大変良かった18名（40.0%）、良かった23名（51.1%）であった。どちらともいえない3名（6.7%）、良くなかった0名、大変良くなかった1名（2.2%）であった。

表1 対象者年齢

n=85		
平均	20.0歳	
標準偏差	2.54	
最小	19歳	
最大	31歳	
年齢区分内訳	人数	%
19～24歳	79	93.0%
25～29歳	5	5.9%
30歳以上	1	1.2%

表2 おむつ装着体験の評価

質問 おむつ装着体験をしてみてもいいかでしたか

	n=45 (回収率 52.9%)	
	人	%
大変良かった	18	40.00%
良かった	23	51.10%
どちらともいえない	3	6.70%
良くなかった	0	0%
大変良くなかった	1	2.20%

3. おむつ装着体験の評価の理由

おむつ装着体験の評価の理由を表3に示した。大変良かった、良かったと学生が表した理由を「おむつ装着している高齢者への共感」「体験から得られた知」、どちらともいえない、大変良くなかったについては、「不快感」と区分した。おむつ装着している高齢者への共感は、「体験することは患者の気持ちが分かりよかった」「おむつ装着体験では、自分の感じたことのない不快さや患者の気持ちを体験することができた」「普通理解できないおむつ利用者の気持ちを体験することができた」などであった。体験からの知は、「床上

表3 おむつ装着体験の評価の理由

大変良かった・良かったと回答した者の理由

おむつ装着している高齢者への共感	体験することは患者の気持ちが分かりよかった。実際に体験してみないと分からないと思う。
	おむつ装着体験することで少しでもおむつ着用している人の気持ちが分かる。
	患者の気持ちが分かる。
	自分がこれから看護する方がおむつ装着していたときに、相手の気持ちを理解してあげられる。
	おむつしている患者の気持ちが分かった。
	おむつ装着体験では、自分の感じたことのない不快さや患者の気持ちを体験することができた。
	普段理解できないおむつ利用者の気持ちが分かった。
	おむつを装着している人たちの気持ちが少なからず分った。
	高齢者の視点になれた。
	恥ずかしかったし、おむつをつけた感じも気持ち悪かったけれど、おむつをつけている人の気持ちが少し理解できた気がする。
実際に装着するのが初めてだったのでどんな気持ちになるのか分かった。	
体験することは患者の気持ちが分かりよかった。	
良かった点は、患者の気持ちを考えた。	
体験から得られた知	おむつ装着している方の変えさや不快さが分った。
	床上排泄の大変さ、おむつ装着の不快感を知れた。
	思ったよりも排尿後の不快感が強かったので、おむつ着用者の気持ちが少しでもわかった。
	思ったよりおむつは嫌だということが分った。
	自分が想像した以上に恥ずかしく体験しなければ理解できない。
	実際に体験してみないと分からないものだと思った。
	こんな機会がないとなかなか体験できないと思った。
	おむつをつけた感じが分かった。実際に体験しないと分からない。
	体験してみないと抵抗感などわからない。
	自分の想像していたのとは違っていた。体験してみて感じたこと学べたことがあった。
気持ち悪かったが気持ちを理解するには大切。	
患者の気持ちに寄り添えられる。看護に役立つ。	
おむつの吸収率が良いと思った。	

どちらともいえないと回答した者の理由

不快感	気持ち悪かった。
	漏れや臭いはなったが生暖かさが良いとはいえない。

大変良くなかったと回答した者の理由

不快感	体験できて良かったが、気分は本当に最悪だった。
-----	-------------------------

排泄の大変さ, おむつ装着の不快さが分かった」「思ったよりおむつは嫌だということが分かった」「自分が想像していた以上に恥ずかしく体験しなければ理解できない」などであった。その他として、「おむつの吸収率が良いと思った」であった。不快感は、「漏れや臭いはなかったが生暖かさが良いとはいえない」「体験できて良かったが気分は最悪だった」などであった。

4. おむつ装着体験後の感想

おむつ装着体験後の感想を表4-①と表4-②に示した。学生の記述内容を「身体的不快」「精神的負担」「体験から得られた本当の気持ち」に区分した。身体的不快は、「モコモコしていてズボンがきつくて入らない。仰臥位で排尿したがとても気持ちが悪かった。ずっと湿っていて嫌だった。おむつは直ぐ吸収する物だと思っていた」「濡れている部分の違和感があった」「蒸れる感じがして排尿しにくく気持ちが悪い」「臭いが気になった」などであった。精神的負担は、「他者におむつを装着されるのは陰部を見られるので恥ずかしい」「おむつをつけている自分が受け入れられず恥ずかしい」「毎日ずっとおむつをつけなくてはいけないなんて辛い」「おむつだからといって安心できなかった。抵抗感はぬぐえなかった」などであった。体験から得られた本当の気持ちは、「早く変えてもらうこと

をこんな気持ちで待っているのかと患者の気持ちを考えることができた」「決して楽なものではない」「恥ずかしさや蒸れによる不快感などおむつをすることの良さが見えなかった」「排泄が終わったら直ぐに取り替えてもらいたい」などであった。

5. おむつ装着している高齢者への援助

おむつ装着している高齢者への援助を表5-①と表5-②に示した。学生の記述内容を「プライバシーの厳守」「不快からの開放」「おむつからの離脱」「自尊心を傷つけない対応」「快適なおむつ装着に向けて」「皮膚の観察」「清潔の保持」「体位の工夫」「抵抗感の軽減」に区分した。プライバシーの厳守は40名(88.8%)の者が記述していた。内容は、「恥ずかしさを伴うのでプライバシーを重視する」「羞恥心を理解して看護する」「意識がなくても羞恥心に注意する」「交換時は必ずカーテンを閉めて言葉を選んで話す。環境整備や素早い交換をする」「羞恥心を伴うので信頼関係が大切」などであった。不快からの開放は33名(73.3%)の者が記述していた。内容は、「排尿後は冷たい感じがして寒い感じがするため、おむつ交換を早めにする」「おむつ装着で排尿しても反応ないままの状態であるのが高齢者の印象なので常におむつ交換の時期を見るためにも、こまめに排尿の有無の観察が大切

表4-① おむつ装着体験後の感想

質問 貴方がおむつ装着体験を実施してみて、思ったことや感じたこと、考えたこと、何でもよいので自由にお書き下さい。

身体的不快	モコモコしていてズボンがきつくて入らない。仰臥位で排尿したがとても気持ちが悪かった。ずっと湿っていて嫌だった。おむつは、直ぐ吸収するものだと思っていた。
	濡れている部分の違和感があり嫌だった。
	おむつがフィットしていなくて心配で不安だった。尿が漏れてしまうのではないかと心配だったが意外にすぐ吸収した気がした。
	おむつを装着して排尿するのが難しかった。
	湿っぼさが肌に触れ気持ち悪い。排尿時漏れるのではないかと不安になった。臭いが気になる。排尿時時間がかった。
	蒸れる感じがして、排泄しにくく、気持ち悪い。
	臭いが気になった。
	ゆったりしていたので、冷たいとかあまり感じなかった。そんなに気持ちの悪いものでもなかった。
	おむつは臀部との間がありバカバカしているので排尿したとき、背中の方まで流れてきそうに感じた。
	腹圧がかけられない。
	排泄した後は、おむつがすごく重くて、気持ち悪くて早く取り替えたかった。
	パンツを履いているときにフィット感がなく、動く時に違和感を感じて、動作が変になったりしたので、おむつ装着したまま、リハビリや早期離床のことを言われても無理だと思う。
	高校生のときに一度体験したが、何度やっても気分は悪くて嫌でした。
	蒸れる、実際に排尿すると臭気が気になる。おむつ装着時であってもすっきりと排泄できるようにすることが大切。
排尿後すぐにおむつの尿が吸収される感じはなかった。	
やはり気持ちが悪く他人に交換してもらうのが嫌だった。早く交換して欲しい。臭いが漏れないか気になる。清潔が保てなさそう。	

表4-② おむつ装着体験後の感想

精神的負担	他者におむつを装着されるのは、陰部を見られるので恥ずかしい。
	おむつをつけている自分が受け入れられず、恥ずかしい気持ちがあった。
	おむつして排尿するときは本当におむつしていることに対して嫌になった。
	毎日、ずっとおむつをつけなくてはいけないなんて辛い。
	初めておむつ着用をして排尿するのにすごく勇気がいると感じた。おむつになかなか排尿できなかった。
	おむつだからといって安心できなかった。恥ずかしいし、抵抗感はぬぐえなかった。
	慣れてないのと緊張でこんなにも苦痛だと思わなかった。2時間がとても長く感じた。
	想像以上に辛い。苦痛を感じた。
	おむつをすることが恥ずかしいことだと言う考えを持っているので、プライドを捨てないとおむつの生活はできないと思った。
	おむつを使用すると弱者になった気分になる。
	何ともいえない虚しさ、悲しさ、情けなさの想いを感じた。おむつを装着している人は、毎日このような想いでいるのかと考えたらとても悲しかった。
	尿意を感じてもなかなか排泄できなかった。おむつに排泄するのは勇気が必要。おむつをしていることだけで恥ずかしいと思った。排泄後のおむつを誰にも見られなくなった。
	自分が体験したのは、たった2時間のことだったのにその間の不快感や嫌だと思ふ気持ちはかなりストレスになったと思う。おむつをつけている人はその苦痛が、ずっと続いている状態なので辛いだろうと思った。
こんなにも苦痛になるのだから、たった2時間で辛い私よりも実際、おむつ必要な方はずっと装着しなくてはならないから、もっと苦痛だと思った。	
体験から得られた本当の気持ち	早く変えてもらうことをこんな気持ちで待っているのかと患者の気持ちを考えることができた。
	恥ずかしさやムレによる不快感など、おむつをすることのよさが見えなかった。
	決して楽なものではない
	すぐに交換する。2時間に1回は確認する。患者の体にあつたおむつの選択。臀部の清潔を保持する。
	感覚意識がある人にとって、おむつは本当に不快だということ。
	患者が嫌な思いをしていること、できる限りおむつは避けたいと思った。
	こまめにおむつを替える。
	最初は何でこんなことかと思っていたが、体験した後は本当に良い体験だった。
	おむつの装着の方法がわからなかった。
	恥ずかしいと思う気持ちを忘れないで一生仕事ができる。
排泄が終わってからすぐに取り替えてもらいたい。	

であると思った」「排泄したら直ぐに取り替えてあげること。命に関わらないからといって後回しにせず高齢者の気持ち（精神面）を考える」などであった。おむつからの離脱は20名（44.4%）の者が記述していた。内容は、「おむつは本当に最終の手段にするということ。出来るだけトイレで排泄できるように介助・練習をする」「おむつをつけているのだから排泄には問題ないと思っていたが、実際はできるだけおむつには排泄したくなかった。できるだけ便器や尿器で排泄できるようにきめ細かく気配りが必要」「いくら大変な仕事でもトイレにつれていかれる方なら連れて行きたい」などであった。自尊心を傷つけない対応は19名（42.2%）の者が記述していた。内容は、「おむつをしていることに対しての不安や嫌だという気持ちを察する。患者の気持ちを暗くさせたり自分自身を責めたりしないように心の看護も行う」「おむつをすることで

嫌だと思っている患者さんもいると思うので慣れた手つきで交換しない」「おむつ交換時の対応で周りの人に気づかれないような声かけ」「歳を取っていてもトイレだけは自力で行いたいという気持ちがあると思うので傷つかないように配慮をする」などであった。快適なおむつ装着に向けては14名（31.1%）の者が記述していた。内容は、「おむつをしっかりと装着する」「体を冷やさないように保温に気をつける」「マジックテープをきつく止めない。漏れてしまうと思ってきつく止めると苦しいし排泄しにくい」「同姓が交換したほうが良い」などであった。皮膚の観察は12名（26.6%）の者が記述していた。内容は、「褥創にならないように観察する」「頻回に観察を行い交換する」「出来るだけこまめに様々のことを見る。かぶれなど皮膚の状態をきちんと見る」などであった。清潔の保持は10名（22.2%）の者が記述していた。内容は、「陰部

表5-① おむつ装着体験後の高齢者への援助

質問4 おむつ装着している高齢者への援助にはどのようなことがあると思いますか

<p>プライバシーの厳守 40名(88.8%)</p>	<p>恥ずかしさを伴うので、プライバシーを重視する。 意識がなくても羞恥心に気をつける。 羞恥心を感じさせないように、心のケアを行う。 羞恥心はなくならないと思うので、プライバシーに配慮することが一番。 羞恥心を伴うので信頼関係が大切。 この歳になっておむつなんてと思っている人も多いと思うので、恥ずかしいなどを少しでも減らせるように気をつけて援助する。 おむつをせざる得ない方に対して恥ずかしい思いを助長することはしてはいけない。 交換時は、必ずカーテンを閉めて、言葉を選んで話す。環境整備や素早い交換をする。 誰かに交換してもらわないといけないので恥ずかしいと感じているから、手早く、漏れないように交換する。 おむつをしていることに対しての不安や嫌だと思ふ気持ちを察する。患者の気持ちを暗くさせたり、自分自身を責めたりしないように心の看護も行う。</p>
<p>自尊心を傷つけない対応 19名(42.2%)</p>	<p>おむつをすることで嫌だと思っている患者さんもいると思うので慣れた手つきで交換しない。 交換時は、表情を伺いながら、なるべく苦痛・不快な気持ちにさせないように接する。 おむつ着用の不快感を理解して関わる。 おむつ交換時の対応で、周りの人に気づかれないような声掛け。 患者の人間としての尊厳を守るためにも適切な対応をする。 看護師の態度で患者を傷つける可能性があるので気をつける。 気持ち悪いし格好が悪いし、おむつをしたくてしている人はいないことを理解して関わる。 歳をとってからもトイレだけは自力で行いたいという気持ちがあると思うので、傷つかないような配慮をする。 他の人の前でおむつのことは言わない。 看護師は嫌な顔をせずに、ニヤニヤしないですばやく交換する。 患者が何でも言える雰囲気と環境を作り、よりよい排泄介助を目指す。排泄介助をするときは、決して嫌な顔をする事なく、逆に排泄ができて良かったという喜びを共に分かち合いたいと思う。 おむつを替えてほしいと言いつらいと思うため、傷つけない声かけ。</p>
<p>おむつからの離脱 20名(44.4%)</p>	<p>おむつは本当に最終の手段にするということ、出来るだけ、トイレで排泄できるように介助、練習をする。 おむつをつけているのだから排泄には問題ないと思っていたが、実際はできるだけおむつでは排泄しなかった。できるだけ、便器や尿器で排泄できるように決め細かく気配りが必要。 いくら大変な仕事でも、トイレにつれていかれる方なら連れて行きたい。 排泄をおむつに頼らないような援助ができるようになりたいと思った。 毎日不快感が続くと不快という感覚がなくなりそう。排泄の自立は本当に大事。 なるべくおむつをしないで、トイレで排尿・排便の介助してあげたい。トイレまでいけない場合は、便器・尿器で介助したいと思う。</p>
<p>抵抗感の軽減 4名(8.8%)</p>	<p>特別扱いせずに、ごく普通のことだと言うことを自然に出す。不快な思いをさせない。 声掛けは、根気強く励まし排泄は大切だと理解してもらう。 おむつ装着の説明の方法を考慮する。 おむつへの抵抗感やマイナスイメージをなくす。</p>

はデリケートな部分なので清潔に保つ」「2時間のおむつをつけているだけでも蒸れがすごかった。褥創をおこさないように清拭をしっかりすることが大切」「排泄後の清潔を保つことは食事への意欲・睡眠の充足を促すことが出来る」などであった。体位の工夫は8名(17.7%)の者が記述していた。内容は、「腹圧がかけにくいいため工夫が必要」「おむつをしていると動きづらいため天井しか見えない。体位の工夫が必要」

「同じ体位でいると汗ばんできておむつもしているためはじめじめするため体位変換したほうが良い」などであった。抵抗感の軽減は4名(8.8%)の者が記述していた。内容は、「特別扱いせずにごく普通のことだと言うことを自然に出す。不快な思いをさせない」「おむつへの抵抗感やマイナスイメージをなくす」「おむつ装着の説明方法を考慮する」などであった。

表5-② おむつ装着体験後の高齢者への援助

不快からの開放 33名(73.3%)	排尿後は冷たい感じがして、寒い感じがするため、おむつ交換を早めにする。
	おむつ装着で排泄しても反応ないままの状態であるのが高齢者の印象なので、常におむつ交換の時期を見るためにもこまめに排尿の有無の観察が大切であると思った。
	排泄したら直ぐに取り替えてあげること、命に関わらないからといって後回しにせず、高齢者の気持ち(精神面)を考える。
	どうしてもおむつが必要な方ならば、汚れたおむつは付けこちが悪いので、こまめに交換したほうが良い。
	排泄終了後はすぐに交換する。時間が立てばたつほど不快感や清潔度の低下につながる。
	早く交換できるように、こまめにおむつの確認をする。すぐに交換する。
	時間を決めて患者に聞く方法が良い。
	長時間オムツを装着しない。
	蒸れるため2時間以上は放置しない。
	しつこくオムツの確認をするのはいけませんが様子をうかがう必要がある
	排尿後言い出しにくいと思うためできるだけ早く気づき、素早く交換する。
	おむつが濡れていると蒸れて気持ちが悪いのでこまめに排泄の有無を確認し、取り替える。
おむつ装着している高齢者のナースコールがなったらすぐに苦痛や不快感、不安を早く取り除く必要がある。	
快適なおむつ装着に向けて 14名(31.1%)	おむつをしっかりと装着する。
	体を冷やさないように、保温に気をつける。
	不快感を感じさせないようにスムーズに装着する。
	おむつ交換時はにおいに注意する。
	おむつがフィットしていないくて動きにくい感じた。そのためしっかりと装着することが大切。
	おむつのマジックテープを動かしても取れないようにする。
	汚れたらすぐに新しいものに変える。尿漏れをしないようにおむつを止める。
	患者に合うおむつを選ぶ。
	マジックテープをきつく止めない。漏れてしまいそうだと思ってきつく止めると苦しいし排泄しにくい。
	仰臥位から側臥位になるようなとき、おむつが臀部にフィットしていないから濡れた部分が触れて不快だった。
	おむつの隙間がないようにして尿漏れを防ぐ。
	排泄による臭気や音の工夫。
	訴えやすい環境。
漏れる不安をなくすためにしっかりと装着する。	
同姓が交換したほうが良い。	
褥瘡の観察	
皮膚の観察 12名(26.6%)	頻繁に皮膚の観察を行い交換を行う。
	出来るだけこまめに様々のことを見る。かぶれなど、皮膚の状態をきちんと見る。
	褥創にならないように観察する。
	陰部はデリケートな部分なので清潔に保つ。
清潔の保持 10名(22.2%)	2時間のおむつをつけているだけでも蒸れがすごかった。褥瘡を起こさないように、清拭をしっかりとすることが大切。
	尿によって濡れた陰部や肛門はとても不快なので、おむつ交換する際に洗浄とパウダーなどでケアをしっかりとすると良い。
	排泄後の清潔を保つことは、食事への意欲、睡眠の充足を促すことができる。
	安楽な体位。
体位の工夫 8名(17.7%)	腹圧がかけにくいため工夫が必要。
	おむつをしていると動きづらいため天井しか見えない。体位の工夫が必要。
	同じ体位していると汗ばんできて、おむつもしているためじめじめするため体位変換をしたほうが良い。体位変換時は、おむつの確認をすることが大切。

IV. 考 察

1. おむつ装着体験の評価と理由

おむつ装着体験後の質問紙に回答した学生は45名と半数であったが、体験後の結果から大変良かった、良かったと回答した者は41名であり体験からの学びが大きかったようである。理由として「体験することは患者の気持ちが分かりよかった」「おむつ装着体験では、自分の感じたことのない不快さや患者の気持ちを体験することができた」といったおむつ装着している高齢者への共感的態度が形成され、患者理解への意識の変化につながったと考えられる。また、「思ったよりおむつは嫌だということが分かった」「自分が想像していた以上に恥ずかしく体験しなければ理解できない」といった理由が多かった。中川が「人間を動かす、あるいは自分を変えるためには客観的知識だけでは不十分で、大事なものはイメージで、このイメージを変えるのが体験学習である」⁶⁾と述べているように体験を通して一般的な知識から経験となったと思われる。おむつ装着体験から今後の看護に活かせることが理解できたのではないだろうか。

どちらともいえない3名、大変良くなかった1名とわずかではあるが存在していた。理由は、おむつ装着体験による不快感を素直に表出している。おむつ装着体験によって、不快感に気づいたことは体験を通して学びえたと考えられる。しかし、不快感だけが強調されることは、おむつ装着体験が学生にとって否定的にならないような配慮の必要性について示唆しているものとする。

2. おむつ装着体験後の感想

学生は、おむつ装着してみても身体的な不快や精神的な負担を具体的に実感し、おむつ装着している高齢者の気持ちに近づき、改めて排泄という基本的な日常生活行為について考えられたと思われる。

学生は、おむつ装着体験をするまで、おむつのイメージが漠然としたものであり、具体的に何が不快であるかを十分理解できていなかったのではないだろうか。しかし、体験を通し身体的不快として、「モコモコしていてズボンがきつくて入らない。仰臥位で排尿したがとても気持ちが悪かった。ずっと湿っていて嫌だった。おむつは直ぐ吸収する物だと思っていた」「濡れている部分の違和感があった」「蒸れる感じがして排尿しにくく気持ちが悪い」「臭いが気になった」など記述しており、どのようなことが不快であり、違

和感なのかを具体的に表現している。また精神的負担として、「他者におむつを装着されるのは陰部を見られるので恥ずかしい」「おむつをつけている自分が受け入れられず恥ずかしい」「毎日ずっとおむつをつけてはいけないなんて辛い」など記述しており、身体面と同様にどのようなことが恥ずかしいのか、屈辱や苦痛とを感じるのかを具体的に表現している。さらに、「早く変えてもらうことをこんな気持ちで待っているのかと患者の気持ちを考えることができた」「決して楽なものではない」「排泄が終わったら直ぐに取り替えてもらいたい」など、体験を通して得られた本当の気持ちが表現されている。

これらの結果から考えられることは、学生は排泄時におむつを装着したことや人にゆだねる経験はほとんどなく、青年期の特徴からも自分の身体に関する羞恥心は強いと思われ、羞恥心や苦痛感などの感想は当然の反応である⁷⁾。出来れば避けたい経験であったのではなかと思われるが、経験を通して恥ずかしさや苦痛などがより具体的に実感できていることが分かる。

排泄は、人間の生命を維持するために重要であり、日常的な行為である。尿意・便意を感じると自力でトイレに行き、自然に行われることが当たり前になっており、個人的な行為でもある。しかし、高齢者は老化現象の進行に伴い、生理的に排泄機能が様々な形で損なわれやすく、失禁、頻尿、下痢などといった排泄障害を起こしやすい。排泄を人の手を借りなければならぬ、陰部を人の目にさらさなければならぬ辛さや恥ずかしさは計り知れない。学生が今回のおむつ装着体験で感じた様々なことは、高齢者の排泄援助のあり方に関わることであり、今後の排泄援助について検討できる機会に繋がると思われる。

3. おむつ装着している高齢者への援助

おむつ装着している高齢者への援助として学生が捉えた「プライバシーの厳守」「不快からの開放」「おむつからの離脱」「自尊心を傷つけない対応」「快適なおむつ装着に向けて」「皮膚の観察」「清潔の保持」「体位の工夫」「抵抗感の軽減」の9項目は、高齢者の排泄援助方法として挙げられているもの³⁾⁵⁾と全てが同じではないが、その内容と同様の結果であった。おむつ装着体験を通して、自らの様々な不快感や苦痛などから、それらを解決するための方法を考えたことが、排泄機能が損なわれたおむつ装着中の高齢者への援助に繋がったと思われる。

排泄行為は“恥ずかしいこと”排泄物を“不浄・不

潔なもの”といった捉え方をするように学習されておりマイナスイメージが強い。そのため、排泄は個室で人知れずひっそりとおこなうものという認識が一般的である。このように排泄行動や排泄の処理を他人に依存しなければならぬ状況に置かれた場合、高齢者だけでなく誰に対しても心理的苦痛を充分配慮する必要がある。

学生の排泄援助の記述から、プライバシーの厳守について特に注目したい具体的内容は、「言葉を選んで話す」「信頼関係が大切」から、援助の際の何気ない言動が心理的にも傷つくことを理解しており援助する際配慮をしたいと考えている。自尊心を傷つけない対応について特に注目したい具体的内容は、「患者の気持ちを暗くさせたり自分自身を責めたりしないように」「歳を取っていてもトイレだけは自力で行いたい」から、おむつを装着しなければならぬ辛さを理解し、高齢者が悲観的にならない対応が重要であると気づけている。また「特別扱いせずにごく普通のことだと言うことを自然に出す」「おむつへの抵抗感やマイナスイメージをなくす」「おむつ装着の説明方法を考慮する」といったおむつへの抵抗感を軽減するためのインフォームドコンセントの必要性にも気づくことが出来ている。

プライバシーの厳守や自尊心を傷つけない対応については、高齢者の尊厳に関わることであるため、多くの学生が気づけるようにしたい。

次に、おむつ装着による不快からの開放や快適なおむつ装着が必要であると気づいている。おむつの不快から開放するについて特に注目したい具体的内容は、「排尿後は冷たい感じがして寒い感じがするため、おむつ交換を早めにする」「命に関わらないからといって後回しにしない」「排尿しても反応ないままの状態であるのが高齢者の印象なので常におむつ交換の時期を見る」である。排尿後2時間以上経過した状態では、尿による冷たさにより体温が低下するという身体への影響にも気づくことが出来ている。また認知症の高齢者の場合は排尿をしたことも忘れてしまうことがあることや、遠慮して訴えてこない場合なども考えることが出来ていると思われる。快適なおむつ装着が必要について特に注目したい具体的内容は、「マジックテープをきつく止めない。漏れてしまうと思ってきつく止めると苦しいし排泄しにくい」「同姓が交換したほうが良い」である。おむつの装着方法は、講義前であったことからマジックテープの止め方にとどまり適切な

他の方法が見出せなかったと考えられる。臨床の場は経験知から工夫されているようであるが、その方法が快適であるかの検証がされていることは少ないのではないと思われる。おむつ会社の報告では、マジックテープの止め方は、一般的に普通の体型の人はクロス止め、骨盤が広い女性の場合は下に向けて止めることを勧めているが、最終的な結論はその人の体型に合わせて止める位置は変えることである。また、漏れない工夫として、おむつのギャザーをきちんと立たせ、鼠けい部にあわせて当てるようにするとされている。おむつの種類は、今回学生が使用した、テープ付きおむつ以外に、パンツ型おむつ、フラット型おむつ、尿取りパットなどがあり、おむつの構造は、中央部分にパルプという吸収剤とポリマーゲルという高分子吸収剤で出来ている。これらの知識があれば、フラット型のおむつを切って使用したりはしないであろう。今後は、快適なおむつ装着に向けて講義で伝える必要がある。しかし、おむつ交換を同姓が行ったほうが良いと記述していたことは、大切なことに気づいていると感心させられた。これまでの研究報告からは見当たらない貴重な意見である。

続いて、皮膚の観察について特に注目する具体的内容は、「褥創にならないように観察する」であり、清潔の保持については「陰部はデリケートな部分なので清潔に保つ」「排泄後の清潔を保つことは食事への意欲・睡眠の充足を促すことが出来る」である。高齢者は皮膚が薄く、尿素などの刺激に弱く栄養状態が良くない場合は、皮膚炎、褥創、尿路感染などを引き起こすことがある。また、排泄後におしぼりを手渡すこと、陰部・臀部を清拭や洗浄することで爽快感に繋がることなど、2年次の学生であることから理解していると思われる。体位の工夫については、「腹圧がかけにくい」「おむつをしていると動きづらいため天井しか見えない」である。排尿時に腹圧がかけにくいことを実感した結果と思われるが、尿が伝い漏れにくい体位でもあり、そのベッドの位置が30度挙上するまでの具体的方法は導き出されていない。しかし、おむつをしている状態は天井しか見えないとの内容から気分転換の方法として体位変換や何らかの工夫が必要なのではないかということに気づけている。

最後に、自立に向けて援助するためにおむつからの離脱する必要性を実感している。特に注目したい具体的内容は、「おむつは本当に最終の手段にするということ。出来るだけトイレで排泄できるように介助・練

習をする」「いくら大変な仕事でもトイレにつれていかれる方なら連れて行きたい」などである。学生は2時間以上のおむつ装着体験で、いかに不快な事であるのかが理解でき、また失禁しているから即おむつではなく、自立にむけての援助が必要であると学んでいる。

以上のことから、学生が高齢者の理解を深めることによって、排泄と言う人間の尊厳に関わるものだからこそ、高齢者の人格を尊重し、よりよい排泄援助が必要であることを考えられたと思われる。おむつを装着する高齢者には、それぞれ原因があると考えられるが、失禁が続くからといって安易におむつを使用することで、精神的ショックや膀胱機能の低下、寝たきり、尿路感染などの弊害があることも良く知られている。しかし、臨床の場では、高齢者の入院が多く、認知症の場合など、業務の多忙や煩雑さにより日常的におむつを使用しているのが現状ではないだろうか。また、看護師の会話の中に「あの患者さんはおむつだから」「失禁だから」といったことを耳にしたことがある。おむつは、排泄援助の最終手段であることを心したいと考える。

V. 結 論

おむつ装着体験をした学生の評価と感想、高齢者への援助方法を明らかにするために調査し、次のことが示唆された。

おむつ装着体験の評価とその理由から、ほとんどの学生にとって、対象の理解を深めるためには有効な学習方法であることが言える。しかし、学生個々を尊重するよう倫理的配慮をしながら活用する必要がある。

おむつ装着体験後の感想は、身体的不快・精神的負担があることに気づき、学生自身が体験により確信した体験をもたらすことが出来た。

おむつ装着体験から学生が捉えた高齢者への援助については、「プライバシーの厳守」「不快からの開放」「おむつからの離脱」「自尊心を傷つけない対応」「快適なおむつ装着に向けて」「皮膚の観察」「清潔の保持」「体位の工夫」「抵抗感の軽減」の9項目が明らかになった。おむつ装着体験を通して、自らの様々な不快感や苦痛などから、それらを解決するための方法を考えたことが、おむつ装着中の高齢者への援助に繋がったと思われる。

VI. おわりに

今回の調査で、学生がおむつ装着体験を通して、幅広く高齢者の排泄援助について考えることが出来ている。また今後の看護に活かそうという考えまで至っている。

今後の課題としては、学生のおむつ装着体験を共有する場を設け、高齢者の排泄援助のあり方を検討する機会とすること、体験から得られた結果を教育内容に反映できるように教育方法を工夫したい。

謝辞

調査にご協力いただいた学生の皆様に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 鎌田ケイ子, 川原礼子. 健康障害をもつ高齢者の看護, メヂカルフレンド社, 50-60P, 2006.
- 2) 土井英子. 新見女子短期大学看護学科卒業生の床上排泄の援助における意識と実態 排泄の援助がケアとなるために, 新見公立短期大学紀要. 20, 77-85, 1999.
- 3) 松村三千子. 老人看護学授業展開の工夫 紙おむつ排泄体験学習と学習効果に関する一考察. 看護教育. 41(5), 374-377, 2000.
- 4) 早崎幸子, 小野幸子, 原 敦子. 成熟期看護方法における紙おむつへの排泄体験学習を通じて 学生が捉えることができた援助方法, 岐阜県立看護大学紀要. 2(1), 137-142, 2002.
- 5) 板橋和子. 老年看護学におけるオムツ着用体験学習の効果, 東京医科大学看護専門学校紀要. 16(1), 55-61, 2006.
- 6) 中川米造. 医学教育における体験学習, 月間ナーシング. 11(4), 57, 1991.
- 7) 丁野みどり, 西川千歳. 老人看護学における学生の体験学習の成果 一紙おむつ着用の体験を通して一, 神戸市立看護短期大学紀要. 15, 91-97, 1996.
- 8) 森 有正. 生きることと考えること<講談社現代新書240>, 講談社, 91-123P, 1970.
- 9) 奥野茂代他編. 老年看護学I 老年看護学概論. ヌーヴェルヒロカワ, 2006.
- 10) 長谷川慧重他編. 国民衛生の動向・厚生指標. 財団法人 厚生統計協会. 53(9), 2006.